『奄美沖縄民間文芸学』第20号、二〇二三年七月刊（23年1月刊）（奄美沖縄民間文芸学会）
山下欣一先生追悼号

山下欣一氏追悼「録音テープ」

三浦佑之

手許に二本の録音テープがある。一本にはオモヒマツガネ・生れ語れ・バシャナガレなど奄美の呪謡とユタのマブリワーシが、もう一本には神ウシアゲとユタの成巫後三年祭の音声が収録されている。どちらも山下欣一氏から送っていただいたもので、一九八〇年四月一日の日付がある。複写とはいえ、このような貴重な資料をいただくに至った経過はまったく覚えていないし、それ以前に学会でお会いしたという記憶もない。おそらく、語りや呪詞の表現に興味を持っていた私は、『奄美のシャーマニズム』（弘文堂、一九八七年九月）を読み、教えを請う手紙を出したのだと思う。それにしても、今考えると、名もない若造に貴重な採集資料を複写して与えるというのは、なかなかできないことである。また、そんなことを気軽に頼んだ（おそらく）恥知らずな我が振る舞いに、今となっては赤面するばかりである。

そんなことがあった年の夏、奄美大島に出かけてはじめて山下さんにお会いした。山下さんを中心に、名瀬で奄美沖縄民間伝承研究会と奄美郷土研究会の合同大会が開催されたからである。大会は八月二、三日、そのあとの四、五の両日は龍郷町での昔話調査が予定されていた。私は山下さんに会う約束を取り付けていたらしく、七月三一日に奄美に入った。その日のスケジュールを、めずらしく保存していた旅行手帖を頼りに復元してみよう。

四時に起床した私は始発電車で羽田に行き、七時発のスーパージャンボで鹿児島へ、YS11に乗り換えて一二時三五分に奄美空港に着く。宿に入ると山下さんから電話があり、一五時三〇分、はじめて山下さんに会った。そして、楠田書店に案内されて奄美関係の本を購入し、市内を見学したあと「笹川」で夕食。そのまま藤井令一さんの「しらゆり写真館」に連れられて行き、藤井さん、登山修さんにご挨拶。その足で四人揃って一九時からはじまる第四回島唄大会の会場名瀬小学校体育館に向かい、二二時までの三時間たっぷり島唄を堪能する（その時聴いた坪山豊さんの歌声がずっと脳裏に響き続けた）。終了後、写真館にもどって〇時一五分まで呑んで盛り上がり、〇時三〇分に宿に帰る。

長くて充実した一日だった。

その後、山下さんとは学会のたびにあちこちでお会いし、ユタさんの家に案内してもらったこともある。お目にかかるたびに、きびしい目で見つめられ「頑張っていますか」と聞かれたが、「はい、なんとか」とあいまいにほほえむばかり。いただいた学恩にきちんと応えることができないままであることを、訃報に接してあらためて気づいた次第である。「私にも遺された時間は多くはありませんが、もういちど頑張ってみようかと思います」（合掌）